
The Chains

あめふらし3号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Chains

【Nコード】

N0022Y

【作者名】

あめふらし3号

【あらすじ】

……またかよ、アイツ。前回から日があんまり経ってないっていうのに。俺は胸の内でごっそりと溜息をついた。——脱走を繰り返すアイツに、追いかける俺。幾度となく繰り返される日常のその裏側を、俺は本当はよく分かっている。主人公から見た友人と、国王、王妃との関係。主人公をも含んだ複雑な関係の行きつく先は、まだ謎のまま。

前編

普段からあまり人気のない、王宮内でも奥まった場所にある庭園にて二人の男が言い争いをしていた。更に正確に言うならば、一人の男がもう一人の男に一方的に罵声を浴びせていた。

「お前、俺の地位でも欲しいの？」

相手から浴びせられる言葉に対して男は特に気にとめた素振りもなく、じつと黙ったままであったが、暫くして相手の言葉が途切れるその刹那を狙ってさくりとそう切り込んだ。その言葉にそれまで己の高ぶった感情のまま止め処なく言葉を連ねていた男は途端に口にすべき言葉を失い、きよろきよろと目を泳がせながらまるでその喉を絞められたが如く、呻き声にも似た、言葉ではない何かを口にしていた。

そんな相手の様子を見た男は徐に腰に下げた刀を地面に置くと、身に纏っていた見るからに立派な軍服をその場で脱ぎ捨ててしまった。軍服の下に着ていた白いシャツに黒のズボンという姿になった男は、軽く肩を回しながら器用に片手でシャツのボタンを上から一つ二つと外して首元を寛げると、一度深く息を吐いた。

「そんなに欲しいならこんなの今すぐお前にやるよ」

目を丸くさせたまま、未だにうまく状況を呑み込めていない相手に向かって男はそう言つと、「じゃ、後はよろしく」と言つて本当にそのまま刀と軍服を置いてその場を立ち去ろうとした。その姿を見てそれまで呆然と立ち尽くしていた男はやっと何とか声を絞り出し、

だんだんと遠ざかりつつある背中に向かって「お、おい！ お前、本気か？」と声を掛けた。

「……俺の今の立場は相応しくない。だからやめる。それだけだ」呼び掛けられた男はその足を止めたものの振り返ることはなく、背を向けたままそう言うとそのまま立ち去っていった。

「陛下。中將殿が先程刀をお捨てになりました」

その言葉が発せられた瞬間、それまでずっと目の前の書類に向かって忙しなく動いていた目と手がぴたりと止まった。

「……またかよ、アイツ。前回から日があんまり経ってないっていうのに。」

部屋の隅にて護衛らしく無表情かつ直立不動を保ったまま、俺は胸の内でこっそりと溜息をついた。中將が刀を捨てた。そうとなれば、その後の展開は簡単に予想できる。いや、これは既に何度も繰り返されたやり取りで、もはや予想とすら言えないかもしれない。

そんなことを考えていると、案の定「大将」と陛下が俺を呼ぶ声が聞こえた。俺がすぐさま陛下の執務机の正面に膝をつき頭を垂れて返事をする、陛下は一言「頼む」と俺に命じた。

「御意」

陛下の短い言葉の意味を正確に読み取り、俺はいつもと同じようにそう答えると、すぐさまその場を辞した。アイツの行き先なんて、一つしかない。俺は足早にその場所に向かった。

「またそんな格好をして。一体どれほど陛下の手を煩わせていると思っているの」

「だからさあ、俺あんな役職なんてやってられないんだって。じっとしてられない質なんだから」

先程から何やら話し声が聞こえてくると思っていたら、やはり思った通りそこに探し人である一人の男の姿があった。窓辺に腰掛け、片手で紅茶を飲みながら愚痴る男が居るのは所謂後宮と言われる場所である。そんな所に、陛下以外の男が存在するなどということはまずありえない。いや、ありえてはいけなはずである。

「なあ、どうやってたらあいつ失望させられるかな。やっぱり悪事の一つでもやらかすのが手っ取り早いのかな。でも俺あんまそういうのやる気しないんだよね」

「またそんな事を言って。どうして陛下の思いを汲み取ってくれないのかしら」

しかしながら当の男はというとまるで自分の家にもいるかのよう
な気軽さで、何を気にするでもなく悠長に会話している。全くお前
は一体何回言ったら分かるんだと口にしよつとした言葉は、けれど
も次の瞬間に掻き消されてしまった。

「……あのさ、普通そんな事言わないよ？ お前はあいつの正妃な
んだから」

少しの間を置いた後で男は呆れたようにそう言つと、微かに口元を
歪めるようにして笑つた。そんな男の表情を見て、俺はまた胸の奥
底で忘れかけていた何かがずくりとその存在を訴えてくるのが分か
つた。

こういう時ばかりは協力的な精霊に感謝しつつ（……どうせ失敗
するものと踏んで、落ち込む俺の姿を嘲笑うために協力しているの
であろうが）、右手を前に出し目標を定めてため込んだ力を発しよ
うとした時、案の定とも言つべきか、視界の中で目標たる男がひよ
いとそれまでいた場所から姿を消したのが分かった。だが、俺の力
量では今更目標地点を変更することは不可能だ。

力を発すると同時に先程まで男がいた場所が一瞬紅い光線に包まれ、
魔術自体は恐らく成功したことが分かった。だがいくら魔術が成功
しても、その場に誰もいないんじゃ何の意味もない。

「……お前、この野郎。俺の体力を無駄にしやがつて」

あまりの疲労感に思わず両膝のあたりを掴むようにして手をつき俯
いた。すぐ傍から聞こえるゲラゲラと笑う声に苛々しながらも、た

つた一度の魔術行使で言葉を発することさえ難しいほど息が上がってしまふ己の非力さに自分でも呆れてしまふ。

これまで攻撃系の魔術についてかなりの鍛練を積んできたが、その努力は依然として一向に実を結ぶ気配がない。一方で防御系の魔術はというと確かに攻撃系の魔術に比べれば遥かに上手く扱うことが出来るものの、それはあくまで精霊の協力があつてこそその話である。俺の場合そもそもこの精霊の協力を得られることが非常に稀なため、俺の魔術の腕前は言わずと知れたものだろう。

「だってなんか直撃したら凄そうだったじゃん。俺も人間だからあんまし痛い目遭いたくないし」

その楽しげな声に顔だけ上げて見ると、まるで何事もなかったかのようにして男は元の位置に戻っていた。足をぷらぷらと遊ばせながら笑みを浮かべる男の姿を見て、またより一層疲れが出たような気分になった。

「あーあ。また失敗かよ……」

「まあそう落ち込むな、エンチェス。お前の体力なら俺が責任持つて回復させてやるから。な？」

「俺を思うなら脱走の頻度上げるんじゃないやねえよ。……疲れるんだよ、阿呆」

何となくその場の流れで思いついた自分の言葉について、実際に口にしてしまった直後にハツとし、さり気なく言葉を付け加えた。

「ほらほら真剣に受け取りなさいよ。目の前でこんなにもエンチェス様は疲労していらっしやるんだから。他でもない貴方の行動によつて、ね」

俺を弁護するかのように引き続き彼女が発した言葉に、男は態とらしく目を細めて俺を見た。

「真剣に、ねえ……」

そんな呟きが聞こえてから暫くして、男は大きな溜息を吐くと徐に窓際から下りて俺の方へと近づいてきた。そして俺のすぐ目の前でやって来ると、そのまま片手を俺の額の前にかざした。体力回復のための魔術だ。

もう一体何度、同じことを繰り返してきたことだろう。コイツが逃げて、それを俺が追いかけて。そうして見つけたコイツに向かって術を放って、失敗して。疲労困憊した俺が文句を言い、彼女もまたコイツを咎めて。それを聞いているんだか聞いていないんだか分からないような顔をした後、徐に俺に回復魔術をかけると、結局コイツはいつも同じようなことを言うのだ。

「分かった、帰るよ。お前が哀れだから」

すなわち、逃げ出して来たばかりのその場所に戻る、と。

「もう、なんてことを言うのよ。毎回毎回大将ともあろう方にこんなにも迷惑をお掛けしているというのに」

「はいはい、申し訳ないですよ」

彼女がその眉をつり上げながら自分に向かって話すのを男は言葉では軽く流していたが、その横顔が俺には微かに微笑んでいるように

見えた。

中編

俺の家は貧しいにもかかわらず子供ばかりが多く、日々の生活はなかなか厳しいものだった。口減らしのためにどこか山奥に子供を捨てることも然程珍しいことではなかったのに、俺の親はよく全員を育て上げようとしたものだと思う。

長男であつた俺は早々にそういった事情を把握し、ある日近くの森で拾ったナイフと僅かな食糧を持って家を飛び出した。家族のためにとかそういった理由からではなくて、ただ単に嫌になったのだ。毎日たくさん働かなければならないこと。腹いっぱいご飯を食べられないこと。更に長男である俺は何かと下の兄弟たちの面倒を見てやらなければならないこと。そういったことが全て煩わしくなり、そんな場所から単に逃げ出したかった。

世界のどこどころか世の中の一般常識すらほとんど何も知らないただのガキであつた俺が旅の途中で死にそうになったことは、もう数え切れないほどあつた。本当によく生き延びたものだ。恐らくはほんの少しばかり、周囲の人間よりも運が良かったのだらう。

家を飛び出してから数年が経ち、流れの用心棒として時に仕事を請け負いながら各地を転々とする中で、次第に名が知れるようになった頃。ある時、馴染みの仲介人を通じてリンロート国第二王女の護衛の依頼があり、そしてそこで初めてセイと出会った。

第一印象はいかにも軽薄そうなただの遊び人としか感じられなかったが、仕事を通じて共に日々を過ごすうちにその印象は大きく変わっていった。セイは始終気を抜いているようでいて実のところは常に周囲に目を配っており、異変にいち早く気づくのはいつも彼だったと言っても過言じゃない。けれどもそれはどれもさり気なさ過ぎて、この事実気付いている者はあまりいなかった。

もう一つ俺が気づいたのは、セイがどうやら王女と知り合いであるということだった。しかもかなり親しい関係であるようで、あまり人目のない時には彼はかなり気安い口調で王女に話しかけていた。その時の彼の表情は普段とはやや異なるものであり、俺には彼がまるで王女に恋をしているかのように見えた。

もし万一それが真実だとすれば、彼は今どんな気持ちでここにいるのだろう。彼女はこれから国王陛下の正妃となるためにイルクという国に向かっており、彼はその護衛をしているのだ。そんな考えが浮かぶ度に俺はその思考を打ち切った。いくら何でもこれは穿ち過ぎだろう、と。

「なあ、エンチェス。お前は何で旅をしてるんだ？」

いつの時だったか、旅の道中でセイが不意に尋ねてきたことがあった。

「……さあな。ただ強いて言うなら生きるため、か？ 俺は貧乏な上に子沢山の家に生まれたからな。今更帰る場所もないんだ」

「ふーん」

「セイは？」

「俺も特に理由はないなあ。ただ俺って同じ場所に長く居られない質なんだよな」

いかにもセイらしい答えだと、その時の俺は特に疑問を持つことなく納得した。

約2カ月にも及ぶ長い旅路を経て無事にイルクの都に到着し、王女から後払い分の報酬を受け取った後、城門を前にその場を後にしようとしていたところ、城門の前に立っていた兵士から「護衛の者たちも中に入るようにと陛下が仰せで御座います」と呼び止められた。そうは言ってもこの場限りの雇われの身である俺たちには関係のない話だろうと、気にせずセイと共にそのまま歩きだしたところ、「お待ち下さい！」という焦ったような声と同時にどういうわけか、これまで旅を共にしてきた十数人のリンロート国の兵士たちに囲まれてしまった。

突然のことに困惑し思わず隣にいるセイを見るが、セイも想定していなかった事態であったのか周囲を鋭く見渡しながら何かを思案しているようであった。しかし暫くして一つ深い溜息を吐くと、「連

れてくならさつさと連れてけよ。どうせ俺たちに選択肢なんてないんだろ？」と普段のセイらしからぬ荒っぽい口調で言った。

「胸糞悪い」

不意に耳元でそんな呟きが聞こえたかと思うと、セイが俺のすぐ横を通り過ぎて行き、周囲が戸惑う中、一人ずかずかと城門の中へと入って行った。

セイと共に城門の中に入り案内された先にいたのは、金色に輝く王座に悠然と座るイルクの国王陛下その人であった。イルクの国王陛下は全く以て噂に違わぬ容貌をしていた。“国のすべてを支配し、何人たりとも寄せ付けない孤高の絶対者”。まさか彼と直接会うことになるとは夢にも思わなかった。

「久しぶりだな。セイ」

「……相変わらず随分と回りくどいことをするんだな。先に言ってくけど俺、こんなところに長居する気ないから。さつさと用件を言ってくれない？」

出会って早々、親しげに声を掛けてきた国王に対して、セイは思わず俺が驚くほど鋭い口調で口早に言葉を返した。この場にもし他の人間がいたならばまず間違いないく「この無礼者！」などと言われた後、不敬罪であるとして即座にその身を拘束されたであろう。ところが国王はそんなセイの言葉に眉を寄せるどころか、「お前は相変わらずだな」とどこか楽しげにその口元を緩めた。

それにしてもリンロート国第二王女に続き、イルク国国王陛下とも面識があるとは。しかもこれまた良くも悪くも浅からぬ仲であるように見える。本当にセイは一体何者なのだろうか。

「エンチエス・ナロイ。セイ・ラナス」

完全に己を第三者であると捉え、セイと国王のやり取りを視界に入れつつも密かに内心であれやこれやと考えを巡らせていたところ、突如呼ばれた自分の名前に再び現実へと意識を向けた。

「お前たちをこの国の大将並びに中將に任じる」

続けて国王の口から発せられたその言葉は、けれどもまるで現実の出来事ではないような、妙な浮遊感とともに俺の耳に入り込んできた。

大将という地位に就いてからしばらく経った、とある日のこと。その日もいつものようにセイを探しに行くように命じられ、まっすぐに後宮へと向かった。ところがどこを探してもセイの姿が見つからず、途方に暮れていると「森の方から匂いがする」とすぐ傍で囁く声が聞こえたため、精霊に導かれるままに近くの森へ向かうと、間もなくセイの姿が見つかった。

鬱蒼と生い茂った一本の太木の下でセイは両足を投げ出すようにして座り込んでいて、そのセイに何者かが覆い被さっているのが遠くからでも分かった。そこで俺は相手に気づかれないようにゆっくりと距離を縮めていった。ところが漸く二人の姿がはっきりと見えるような距離まで近づいた時、「止まれ、エンチエス」と低く鋭い響きを持ちながらも聞き慣れたその声に、思わずぴたりと動きを止めてしまった。

「そのまま後ろを向いて3秒数えろ」

続く声に自分でも無意識の内に体は従っていて、気づけば俺はその場で後ろを向いていた。

心の中で3秒数え終わると同時にカシャンツと刀が鞘に収まる音がして、すぐさま俺はその音がする方に向き直った。驚いたことにそこには気だるげな様子で額の辺りを片手で押さえるセイがいるのみで、先程までセイに覆い被さっていた何者かの姿が消えていた。

「……悪い。もう少しだけ待ってくんない？」

セイは薄目で俺を見ながら小声でそう言うと、こちらの返事を待たずして素早く目を閉じてしまった。いつになく疲れ切ったその表情を見て、わざわざ起こすような真似も出来ず、俺はセイの言葉に従うべく彼の隣に腰を下ろすと徐に目を閉じた。

——中將殿はもしかするとかの“夜明けの神”と呼ばれる男
なのではないか、という噂がある。

ぼんやりと夢と現の狭間に意識を漂わせていると、ふと以前、再会
した際の二男の言葉が脳裏に浮かんだ。

大將という地位に就いて間もない頃。セイを探していた時、偶然
にも城内の渡り廊下にて再会した二男は、幼い頃の無愛想はどこへ
やらといったような愛想の振りまきようで、そのあまりの違和感に
つい「何か気持ち悪くなつたな」とぼそりと呟くと、それを聞き逃
さなかった二男によつて近くの物陰に連れ込まれ、「このクソつた
れが！ よくも一人で逃げ出しやがったな！」と一切の容赦なく首
を締め上げられた。

思えば幼い頃の二男は始終無口にして無愛想で、とにかくどこへ行
くにも俺の後をついて回っていた。そんな彼が、勝手に逃げ出した
長男に次ぐ二男としてあの家でやっていくのはなかなか大変であつ
たのだろふなと思ひ、やや意識が遠のきつつも何とか手を伸ばして、
よしよしとその頭を撫でてやつた。

暫くして多少は気が済んだ様子の二男は俺を解放すると、唐突に
「エンは多分、随分と厄介なことに巻きこまれてる」と真剣な顔を
して俺にそう告げた。そのまままた何かを話し出そうとする二男の
口を俺は咄嗟に手で塞ぐと、精霊に頼んで俺と二男のいる空間に防
音の魔術を行使した。

「馬鹿。どこで誰が聞いてるか分からないだろうが」

「エン。エンは知ってるか？ あの中將殿がかの“夜明けの神”ではないかという噂」

魔術が成功したことを確認した後で手を離すと、俺の言葉を無視して二男は口早にそう尋ねてきた。

「……“夜明けの神”？ 世界のあらゆる戦場に突如として現れ、たった一人でその戦局を一転させるほどの力を持つっていう男の正体がセイだって？」

先の全く見えない暗闇を照らし出す一筋の光のようにその人物は現れ、絶望に満ちた長い夜を一瞬にして消し去り、誰もが待ち望んだ夜明けの日を連れて来る。それはまるで夜明けを司る神のように、とどこかの吟遊詩人がそんな風に歌ったことから、彼は“夜明けの神”と呼ばれている。彼は神出鬼没につき、実に様々な場所に現れるそうだが、不思議なことに誰一人として彼の容貌どころかその声すら覚えていないという。

「なんでも陛下は以前からその“夜明けの神”に対してかなり強い関心を抱いていたそうだ。……陛下の中將殿への対応は正直、かなり異様だろ？」

「まあ、確かにそうかもしれんが」

そう言つて俺が全面的な賛同を避けるような曖昧な返事を返すと、二男は先程よりも強い口調で更に続けた。

「陛下は基本的に『去るもの追わず』。それをよりにもよつて大將に連れ戻させるなんてありえないんだ。大將つてのは言わば陛下の

私軍総帥同然なんだぞ？　いかに中将殿と言えどエンの方が上なんだぞ？」

ちゃんと分かっているのか。いや分かっているまいだろう、とでも言わんばかりに二男は言葉を畳み掛けてきた。しかしながら、これでも一応は自分の地位とやらをきちんと認識しているつもりだ。陛下の私軍に属し、更に特権的な地位である大将、中将、少将という3つの地位のなかの最高位に俺は今、就いている。

「……正直話を聞く限り、エンは体の良い中将殿の監視役みたいだ」

二男はそう言ってその唇を噛みしめると、それきり口を噤んでしまった。けれども俺に向けてくるその目ははつきりと不安だ、と訴えていた。

後編

——遙か昔に神が創り出し、人間に与えたとされる刀がこの世界には3本存在する。

そしてそのうちの1本がこの刀なんだと、少しして徐に目を開けたセイが淡々とした口調でそう説明した。

神が創り出した刀という話は、これまでに何度か小耳に挟んだことがある。ただとにかく驚異的な力を持っているらしいという話だけで、その刀自体が意思を持っており、更には所有者に対して対価を要求するなどといった話は全く聞いたことがなかった。セイの説明する内容が衝撃的すぎて、ほとんどついていけずにいる俺を放置したままセイは「そんなわけで」と言葉を続ける。

「俺の刀はさ、血を浴びないと錆びる刀なんだよ」

だからちよつと血をやってたんだと、セイは事も無げに言うつつくと立ち上がり、城の方へ向かって歩き始めた。その後ろ姿を目で追いつつ、「じゃ、じゃあ、さっきの奴は誰だったんだよ？」と慌てて尋ねると、セイは俺に背中を向けて歩き続けながら「だから刀だってば。自分で自分を斬るのが嫌だから、刀に自分で採ってもらってたんだよ」と面倒くさそうに答えた。そして少し離れた場所まで行くと、ふとその場に立ち止まって振り返り、「おい、エンチエス。なにばさつとそんなとこに突っ立ってたんだよ。お前、俺を呼びに来たんだろ？」と呆れたような表情をしながら笑った。

それ以来、何度かセイが、彼曰く刀に血を与えていると思われる現場に遭遇した。しかし結局、これまで一度としてその刀と思われる人物の顔を見たことがない。以前、そのことをそれとなくセイに言うつと、「あー、無理無理。コイツ、すごいプライド高いし。契約者の俺ですら嫌がってたのに、他の奴に見られたなんてことになったら何を仕出かすか」と深い溜息を吐いた。これまでの苦勞を感じさせるような、その重い溜息に俺が「なるほどな」と深く頷いてみせると、セイは何を思っただのか突然「そうだ、それが良い」などと呟いた後、にやりとした笑みを浮かべて言った。

「……なあ、この刀の真名教えてやるつか？」
「いや、遠慮する。断固として遠慮させて頂く」

その言葉の意味を深く考えることもせず、ほとんど反射的に、間髪をいれずそう答えた俺に対して、セイは一瞬呆氣にとられたような顔をした後、文字通り吹き出した。「エンチエス。お前、普通はもうちよつと悩むとこなんじゃないの」と途切れ途切れに言いながら、結局セイは目尻に涙が浮かぶまで笑い続けた。思えば、ここ最近はある風に笑う姿を見た記憶がない。

イルク国国王陛下から大将になれと命じられたあの日。突然のことに茫然とする俺の前に国王により引き出されて来たのはなんと、数年前に置き捨ててきた兄弟の一人である三男であった。これは一体どういふことなのかと考える間もなく、薄らと涙を浮かべた三男に「兄貴！」と思い切り抱きつかれた。記憶の中にある小憎らしいばかりであった幼い三男の姿を脳裏に浮かべながら、訳も分からなのまま、取りあえずは張り付いたままの三男を何とか宥めすかして引き剥がし、事情を聞いた。

話を聞くと、俺の故郷は俺が旅に出てから程なくこの国の支配下に置かれることになったようで、今は二男と三男、それから三女がこの城内で文官、軍人、侍女とそれぞれ異なる職種で働いているということであつた。それらの事実とこの状況を擦り合わせてみるに、どうやら俺は家族を盾に国王に脅されているのだということが分かつた。間違つても、久しく会うことのなかつた兄弟の再会、なんて状況ではなかつた。

元々、家族を憎く思つて家を飛び出したわけでもなく、家が貧乏であることさえ抜きにすればむしろ家族のことは好きだった。周囲を巻き込むようなやり口はあまり好きではなかつたが、国王という大勢の上に立つ立場の人間であるならばそれも仕方がないと、ほとんど腹を決めていたところ、ふとセイと目が合った。

お前は本当にそれでいいのか、とそんな風に聞かれているような気がして、俺は視線を合わせたまま軽く一度だけ頷いて見せた。するとセイは、その顔を思い切り歪めた。今にも畜生、と毒突き始めそうなのその表情はけれども瞬く間に消え去り、セイは一つ溜息を吐

くとその視線を国王に向けた。

「……暇潰しに付き合ってやる。でも生憎、俺は同じ場所に長くは留まらない質だからさ。飽きたらいつでも俺はここを出ていくからな」

「只今、戻りました」

セイと別れた後いつものように報告をしに執務室に向かうと、相変わらず陛下は執務机に向かって山のように積み上がった書類を次々と手に取っていた。

「御苦労。……奴は？」

「ちょうど今、刀を取りに行っております。間もなくこちらに参上するかと」

俺がそう言い終わると、扉の向こうからコンコンと扉を叩く音がした。それから続けて「参りました」と感情が一切感じられない平坦な声が一言そう告げるや否や、陛下はそれまで一心に取り組んでいた書類から顔を上げて俺を見た。

「下がってくれ」
「御意」

その場で一礼して扉の前まで行くとタイミングよく扉が開き、ちょうど俺と入れ替わるようにしてセイが部屋の中へと入って行った。ちらりと見えたその横顔は無表情そのもので、後宮で見せた穏やかな雰囲気はどこにもない。きつちりと正しく軍服を着こなす姿は容易に他者を近づけない、殺伐とした雰囲気すら纏っており、まるで別人のようである。

セイはあの刀がある限り、本来同じ場所に長くは留まれない宿命にある。あの刀がある限り、彼は嫌でも血を求めて戦場を彷徨い続けなければならないのだ。二男から話を聞いた時は嘘だとは思えなかったが、あの現場を見て以来、かの”夜明けの神”はまさにセイ以外にありえないと確信している。そうだとすれば、陛下の異様と言われる行動も納得がいく。伝説の刀を携えた最強の軍人たる”夜明けの神”は、まさに誰しもが喉から手が出るほど欲しがる存在だ。

きつとセイは他の誰よりも、痛いほどにこの現状を理解している。彼はこの国に来た際に言っていたとおり、実際のところ本気でこの

国を出て行こうと思えばいつだって出て行けるはずなのだ。幾度となく脱走を繰り返しながら、それでも結局また戻って来るのは他でもない、王妃の存在があるからだ。

頻繁ではないものの、陛下は王妃の下へ定期的に通っている。まだ子宝には恵まれていないが、俺から見る限り両者の関係は概ね良好であるように思う。けれども同時に、王妃に対する陛下の挙動があまりに堅苦しいようにも思う。長く空席のままであった王妃の座に、陛下自らが望んで彼女を迎えたという割にその片鱗が全く見えないのだ。

一方で、その陛下が明らかな執着を見せる相手というのがセイである。そしてセイは王妃である彼女と元々顔見知りであり、更に言えば彼女に対して少なからぬ好意を抱いている。ここでまた穿った考えをすれば、もしかすると陛下が望んでいたのはあくまでセイであって、彼を手に入れるために彼女を王妃に据えたのではないだろうか。そうでなければ、いくらセイといえどもあれ程頻繁に王妃たる彼女の下を訪ねるわけがない。いや、セイであるからこそ、そんな真似をするからにはそこに何か確固とした理由が存在するはずなのだ。

そして自惚れでないとすれば、俺もまた多かれ少なかれ彼の足枷の一つになっただけでしまっているに違いない。セイは一見すると軽い遊び人のように思えるが、実際は非常に情に厚い人間である。そして頭の回転が恐ろしく速い。セイはきつと、自分のせいで俺を面倒な事態に巻きこんでしまったと気に病んでいる。しかし、実際そうなのかもしれないが最終的にあの時ここに留まると決めたのは俺自身である。どうせ一度は家族を捨てたのだ。あの時もう一度捨てたって良かった。

けれどもあの日、俺はそうはせずにまんまと国王の思惑通りに拾い上げた。そしてそれをきっかけとして全てが決した後、すぐ傍で「全く甘っちょろい野郎だよ、お前は」と精霊が俺に言った。

「お前はさ、いつまでたつても甘っちょろい野郎のまんまで一番大切なもの以外を捨てられない。お前みたいなのが戦場なんざ行つた日にゃ、そりゃもう無様な死に顔を晒すはめになるんだろうな」

あの非常に意地も口も悪い精霊は、常にありのままの真実のみを口にする。確かに俺はこれまで一度も戦場という場所に立つたことがない。正直、なるべく避けて通るようにしていた。それはきつと、この精霊の言うとおりであるに違いないと俺自身が頭のどこかで認識していたからなのだろう。

友人を思うなら、セイにきちんと伝えるべきなのだ。俺のことは気にしなくて良い、と。たとえ陛下の不興を買ったとしても、あの時この場に留まると俺自身が決めた以上、それはそれとして潔く何事をも受け入れるのが道理なのだから、それをお前が自分のせいではないかと気にするのはむしろおかしな話なのだ、と。

それなのに俺は、気にするなというその一言すら言えずにいる。一度は捨てたはずの家族を今度こそ本当に失うかもしれないのかと考えると、まるで魔術をかけられたかのように何も言えなくなってしまうのだ。そのくせ友人が王女に向かつてどこか苦しげに微笑む表情を見るたびに、この上ない罪悪感を覚える。俺にとってはどちらも大切な存在で、どちらをも切り捨てることが出来ない。

そんな俺の苦悩もまたあの精霊はお見通しのようで、あの日、精霊

の言葉にただ無言で俯くしかなかった俺に対して「まあでも、そんなしょうもないお前が必死に足掻いてんのを見んのも俺は嫌いじゃねえよ？」と慰めに見せかけた蔑みの言葉を口にして笑った。

「外せ」

ガチャリと扉が閉まる音が響き、扉の向こうから微かに聞こえていた足音も全く聞こえなくなった時。執務机の正面に立った男はそう言って、相手の視線をそこに向けさせるように自分の胸に当てた手を二度叩いて見せた。

「近頃は脱走の頻度が上がっているようだな。何が不満だ？」

「不満ってどうかさ……言っただろ？俺は同じ場所に長く留まれない質だって」

自分の言葉を見殺して全く違う話を振ってきた相手に対して、男は不愉快そうに顔を顰め、そんな話はどうでもいいとばかりに心底面倒くさそうにそう答えた。執務机に座った男は正面に立つ男の様子をじっと見つめていたが、ふとその眼光を鋭くさせた。

「……いつまで知らない振りをしているつもりなんだ？」

男は相手の突き刺すような視線に対して全く応えた様子はなく、僅かな間をおいた後、軽く鼻で笑ってみせた。

「その言葉そのままそっくり返してやる。お前こそいつまで知らない振りをしているつもりなんだ？ 俺がまともに仕事をしている姿を見たことがないって言っつて、そんな奴がどうして中将なんだって疑る奴が城内で増えてるんだろ？」

執務机に座っていた男は無言で立ち上がると、ゆっくりと相手の方へと近づいていった。

「そんなにこの刀の使い手が欲しいなら、お前に真名をやるから。だからとつとコレを外してくんないか？」

そう言っつて男は徐に首元を寛げると、段々と自分に近づいてくる相手に見せつけるようにしてシャツの中から首にぶら下げられた鎖のついた何かを引っ張り出した。すると先程まで執務机に座っていた男は彼のすぐ目の前に立つと、その首にぶら下げられた鎖を手繰り寄せてそこに付けられた宝玉を握り締めた。

「セイシェラジナス」

男は突如として宝玉を強く引くと、素早く彼の後頭部に手を回して耳元でそう囁いた。するとその言葉と同時に男の手の中の宝玉が一瞬淡く光り、その宝玉を身に付けた人間の身の一切の自由を奪い去った。

「解放出来る訳ないだろう。……分かれ」

その甘く掠れた声は相手の思考さえも奪い、紡ぎだす柔らかなそれは耳元から首筋へと移動すると、確かな痛みを残していった。

あとがき

「The Chains」ですが……全く以て予想外の長さになりました。

その原因は恐らく順番に書かずに、思いついた場面からばらばらに書いたものを最後に繋げたためだと思われます。時間系列が少々ややこしいことになっているのもそのせいかと（汗）。

そんなわけで相変わらず説明が不足している箇所がちらほらと見受けられるのではないかと思います……その辺りに関してはご想像にお任せします↑

しかしながら最後に一点だけ、王妃である彼女は自ら進んでその地位に就いたということだけは記しておきます。

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0022y/>

The Chains

2011年11月14日20時12分発行